「手がかり」の役割に気づかせる教授方法の効果検証

佐々木　嘉則

「リサーチコンセプト」は、目下研究テーマを模索している若手研究者に対し興味深い研究対象や切り口を紹介するために、今号より新たに設けたコーナーである。

1. 本稿の目的

本稿は、「学習目標となる言語表現を用いなければ解決できないようなコミュニケーション課題を遂行させることを通じて習得が促進される」という仮説(Loschky & Bley-Vroman 1993)を、その背景となる心理言語学の理論とともに紹介し、この仮説の検証を研究課題として提案するものである。

2. 理論的背景：言語理解における手がかりの役割

「主語が 3 人称単数の現在形動詞には接尾辞-(e)s が付加される」という英文法の規則は一見単純でありながら習得が難しいことが知られており、相当な上級者にもときおり誤用がみられる(白井 2004)。その理由の一つとして挙げられるのが、多くの場合この接尾辞の有無が文意に影響を与えない、つまりコミュニケーションのためには必要でないということである。

例として、次のような英文における形態素-s の役割を考えてみよう。

(1)　John eats lunch at noon.

(2) *John eat lunch at noon.

例文(1)から-s を省いて(2)のようにすると、文法的には非文(*)になるが文意は支障なく理解できる。したがって、聞き手はこのような文では-(e)s の有無に注意を払わなくても、話し手は-(e)s を動詞に付加しなくても、意思疎通（コミュニケーション）が可能である。

しかし実は次のように、3 人称単数現在の-(e)s が文意の解釈に決定的な影響を与える場合もある。

(3) Hanako is a mother of twin babies who sleeps well.

(4) Hanako is a mother of twin babies who sleep well.

例文(3)では sleeps の主語は単数名詞（3 人称）の mother であるのに対し、(4)では sleep の主語を複数名詞 babies であると解釈しないと文法的に正しい文にならない。つまり、動詞接尾辞-s の有無という情報（手がかり）は(1) (2)を解釈する際には必要ないのに対し、(3) (4)を正しく解釈するためには重要な手がかりを与えているのである。

述語の形によって主語の解釈が異なるという現象は英語だけではなく、日本語でも次のような場合にみられる。

(5) 私はきのう六本木ヒルズで社長の奥様をおみかけしました。その時は、新入社員の滝沢君と一緒でした。

(6) 私はきのう六本木ヒルズで社長の奥様をおみかけしました。その時は、新入社員の滝沢君と御一緒でした。

例文(5)では「一緒でした」の主語は「私」であると考えることが可能だが、(6)の「御一緒でした」の主語は「奥様」であると解釈すべきだろう[1]。もし(6)のような文を与えられても述語の形態的特徴から主語が特定できることに思いが及ばず間違った解釈をする学習者がいたとすれば、その学習者は日本語文の主語解釈において述語（敬語）手がかりが果たす重要な役割を充分に認識していなかったことになる。

一般に、文を理解するにあたって様々な手がかりが持つ重要性の順位は、言語によって大きく異なることが知られている。たとえば日本語においては格助詞、英語では語順が特に重要な役割を果たす(MacWhinney & Bates 1989)。第二言語を学習するにあたっては、目標言語において重要な手がかりに対する敏感性を適切なレベルまで高めることが必要である(佐々木 2003; Sasaki & MacWhinney

forthcoming)。

3. 手がかり習得の条件

それでは手がかりへの敏感性はどのようにして高めることができるのだろうか？McDonald(1989)は、ある文に対して与えた解釈が間違っていたことに気づいた時、正しい解釈を指し示していた手がかりに対する敏感性が高まるとしている。たとえば次のような文はどのように解釈されるだろうか？

(7) Hanako is a mother of twin babies who drinks a lot of powder milk.

(8) Hanako is a mother of twin babies who drink a lot of beer.

このような文を聞かされた時[2]、英語に慣れていない日本人学習者の多くは意味手がかりにたよって(7)の drinks の主語を twin babies、(8)の drink の主語を mother と解釈することが予測できる。（大人が粉ミルクを好んで飲んだり赤ん坊がビールを飲んだりすることは、常識的には想像しにくい。）しかし、主語と動詞の一致という手がかりによれば解釈は逆になり、(7)の drinks の主語は mother（単数名詞）、(8)の drink の主語は twin babies（複数名詞）でなければならない。つまり、これらの文では意味手がかりと一致手がかりが文意をめぐって競合対立する関係にある（競合文）といえる。

MacDonald & MacWhinney (1989)にしたがえば、これに類する競合文の解釈を学習者に求めその都度正誤フィードバックを与えることによって、最初意味手がかりに頼っていた学習者が一致手がかりへの敏感性を増すことが期待できる。平たくいえば、「えっ、どうしてこの解釈が間違いなの？！」という体験を通じて、解釈の決め手となる手がかりの重要性に対する気づきが生じるわけである。

一方、(9)や(10)ではそれぞれ、意味手がかりも一致手がかりもともに同じ解釈を支持している。

(9) Hanako is a mother of twin babies who drinks a lot of beer.

(10) Hanako is a mother of twin babies who drink a lot of powder milk.

このような文だけを与えても、学習が速やかに進むことは期待できない。

論点を単純化するためにさらに簡単な例文をあげよう。

(11) ゴリラが熊をたたいた。

(12) ゴリラを熊がたたいた。

例文(11)のように語順手がかりと格助詞手がかりがともに同じ解釈（主語＝「ゴリラ」）を支持する文よりは、(12)のように語順（SOV）が支持する解釈（主語＝「ゴリラ」）と格助詞が支持する解釈（主語＝「熊」）が異なる文の方が、格助詞の重要性に対する気づきを促進すると予測できる。

4. 「課題必須性」仮説

これまでのべてきた言語習得の条件に関する所説は「競合モデル」(competition model）と呼ばれる心理言語学の理論にもとづくものである。一方、競合モデルなどの心理言語学理論やその実証的知見を参照しつつ、より教育志向的な論考において同様の問題を論じているのが Loschky & Bley-Vroman(1993)である。彼らは「ある表現を処理しなくては解決できないコミュニケーション課題を遂行することで気づきが促され、当該表現の習得が促進される」という仮説を外国語教育のためのタスク開発の原理として提唱し、ある手がかりが課題遂行にとって必須であるかどうか（課題必須性：task essentialness）などの評価基準によって学習用タスクを評価することができるとしている。上記の(7)や(8)を解釈させることは、「一致手がかりを使わなくては解決できない文理解課題」であるといえよう。

5. 研究課題

ただし、以上の提案はおおむね、文処理の実験的研究などにもとづく言語心理学理論から演繹的に割り出されたものであり、教育実践の中でその効果が充分に検証されているとは言い難い。学習目標となる言語表現を用いなければ解決できないようなコミュニケーション課題を遂行させることによる習得促進効果を検証することが実際にできれば（英語の例でいえば、「上記の(9) (10)のような文よりも(7) (8)のような文を解釈させる方が一致手がかりの習得を促進する」という仮説が定量的に実証されれば)、第二言語教育界、言語習得学界の双方に重要な貢献となろう。そのためには実際の教室内における効果比較研究のほか、より厳密に条件を統制した実験場面での学習過程の分析など、様々なアプローチが考えられる。新進研究者のフレッシュな発想による挑戦を期待したい。

注

1. 日本語の敬語動詞の主語選択ストラテジーに関する実験心理言語学的研究には Yoshimura & MacWhinney (2004)がある。
2. 同じ文を解釈する場合、聴解課題条件よりも読解課題条件の方が文法手がかりの影響が強いという報告がある(佐々木 2003)。

参照文献

佐々木嘉則 (2003)「競合モデルに基づく第二言語習得研究の論点－日本語習得の視点から－」畑佐由紀子編『第二言語習得研究への招待』くろしお出版 31-46.

白井恭弘 (2004)『外国語学習に成功する人、しない人－第二言語習得論への招待－』岩波書店

Loschky, L. & Bley-Vroman, R. (1993) Grammar and task-based methodology, In G. Crookes & S. Gass (Eds.), *Tasks and Language Learning: Integrating Theory and Practice*, Clevedon: Multilingual Matters, 123-167.

MacWhinney, B. & E. Bates (Eds.) (1989) *The Crosslinguistic Study of Sentence Processing*, Cambridge: Cambridge University Press.

McDonald, J. L. (1989) The acquisition of cue-category mappings, In B. MacWhinney & E. Bates (Eds.), *The Crosslinguistic Study of Sentence Processing*, Cambridge: Cambridge University Press, 375-396.

Sasaki, Y. & MacWhinney, B. (forthcoming) Competition model, In M. Nakayama, R. Madzuka & Y. Shirai (Eds.), *Handbook of East Asian psycholinguistics*: *Japanese*, Cambridge: Cambridge University Press.

Yoshimura, Y. & MacWhinney, B. (2004) Honorifics in Japanese sentence interpretation: Clues to the missing actor. Paper presented at CogSci 2004, August 5, Available: http://www.ccm.ua.edu/pdfs/352.pdf

ささき　よしのり／お茶の水女子大学

sa_yoshi@cc.ocha.ac.jp